

平成 30 年 1 月 9 日

南の風ウインターカップ特集号 V

南部ミニバスケットボール連盟

会 長 藤原 敬一

続きです。大阪桐蔭を勝利に導く大きな要因となったのは、何と言っても6番の鈴木選手の3Pで間違いのないと思います。決勝戦で8本（24点）決めたのです。脅威ともいえる数字です。彼女は2回戦の初戦から準決勝の桜花学園戦までは、どのゲームでも3Pは1本しか決めていませんでした。一番大事なゲームで大ブレイクしたのです。また大阪桐蔭の凄さは、オンザコートの選手が万遍なく得点をしていることです。

4番永田選手9点、6番鈴木選手27点、7番小田垣選手13点、8番永井選手17点、11番田中選手5点、15番竹原選手7点、18番小林選手8点、という具合に誰もが得点に絡んでいました。

準々決勝の東京成徳戦で29点、準決勝の桜花戦で35点挙げた、15番竹原選手が7点に抑えられても周りの選手が十分過ぎるほどカバーしたのです。相手の安城学園はディフェンスのポイントを何処に絞ったらいいのかたいへん苦労したと思います。ポストの竹原選手を抑えれば、キックアウトやエキストラパスから3Pを打たれるし、チェックに出ればドライブのカットがあるのです。安城学園とすれば、2回戦からの準決勝までの大阪桐蔭のデータから見て、竹原選手を抑えれば得点力は半減するとみたと思います。この作戦はある意味成功でした。竹原選手を7点に封じたのですから。しかし6番鈴木選手の3Pを中心に、上記したように5人の選手に2ケタから2ケタ近くの得点を上げられたことは誤算だったと思います。

一方安城学園のオフェンスは、8番千葉選手の3Pシュートがキーポイントでした。1Qの流れを変えるきっかけや2Qの相手を突き放す要因も、そしてオーバータイムの要所でも千葉選手の3Pが握っていたように思います。彼女は6本の3Pを決めることになるのですが、「ここで得点がほしい」、という時にしっかりベンチの期待に応えていました。千葉選手はトータル26点挙げました。また、21点を挙げた13番野口選手は2Qからオーバータイムにかけて、ここぞという時にミドルショットやドライブインが決まりチームに貢献しました。彼女はPFなのですが、決勝では相手のゾーンをアタックするためにトップガードもこなす器用さもみせました。他に7番の相澤選手のミドルショット（11点）やここ一番でショットを決めた11番深津選手、目立たなかったのですが流れの悪い時にワンショットをきちんと沈めた4番キャプテンの上村選手の活躍（8点）も見逃すことができませんでした。

ここで、このゲームで安城学園が用いたゾーンアタックについてです。基本に忠実にオーバーロードして攻めていました。エイベックスと呼ばれるポジション、ローポスト（ニュートラルエリア）、ショットコーナー付近、ボールサイドのウイングに1人ずつ配置して攻める戦法です。ゾーンの片側をアウトナンバーにして攻めるやり方です。このトライアングルにパスを回すことによってノーマークをつくる攻撃方法です。大阪桐蔭の3-2に対して効果的にボールが回ったのですが、攻略するまでには至りませんでした。フィニッシュのショットが落ちてしまうケースが多かったからです。しかし、ゾーンを攻める一つの戦術として、観ている方の参考になったはずです。

最後に、もう一度両チームの選手の皆さんに「感動をありがとうございました！！」と伝えたいと思います。次号ではウインターカップ『ア・ラ・カ・ル・ト』を綴ります。